

イメージによる日本語漢字教育法

乾 浩(Inui Hiroshi)*

- I. はじめに
- II. 漢字の造字法
- III. イメージとその限定
- IV. 授業での提示方法
- V. 評価方法
- VI. おわりに

I. はじめに

「漢字教育」と一言と言っても、その内容には様々なものがある。「字体」「読み」「意味」の3つの項目を教えなければならない。例えば「会」という漢字を教えるにしても「字体」は、韓国で使われている字体(「會」と日本で使われている字体(「会」)に違いがあれば、その相違点を教えなければならない。「読み」に関しては「音読み」(「カイ・エ」と「訓読み」(「あう」)を教えなければならない。また、そこに「意味」を付加していくとなると、教える側も教わる側も、相当の努力が必要になる。

日本語教育における漢字の重要性は、教師、学習者ともに認めるところである。しかし、時間が限られている教育現場では、漢字学習＝暗記と位置づけられ、教師は学習者に課題として押し付け、学習者は、ただひたすら覚えるしかないのが現状である。今まで漢字に触れてこなかった学習者にとっては、かなりの負担であり、その結果、漢字嫌いになる学習者が増えていくのである。

* 숭실대학교 일어일문학과

本稿では、そのような漢字教育の現状において、学習者に負担をできるだけ与えず、かつ楽しく学べる「イメージによる日本語漢字教育法」を提案する。

Ⅱ. 漢字の造字法

複雑な漢字を1つ1つただ単に丸暗記していくのは、とても大変なことである。しかし漢字をよく見ると、そこには体系的な構造が見えてくる。その体系を理解する基礎となるのが漢字がどのように造られたのかという「造字法」である。

漢字を「造字法」という点から見ると、漢字は次の4つに分けることができる。

- ①象形文字
- ②指事文字
- ③会意文字
- ④形声文字

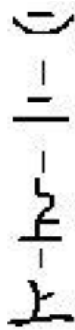
まず、①の象形文字(図1¹⁾)は、例えば「人・木・日・月」などのように物の形を描いた文字である。②の指事文字(図2)は「上・下・本・末」のように、位置や状態などの抽象的な概念を表した文字である。③の会意文字(図3)は「男・休・林炎」のように、①と②の漢字を組み合わせで造った漢字である。例えば「男」という漢字は、象形文字である「田」と「力」を組み合わせで、「田」で「力」を出して働く人、つまり「おとこ」を表したものである。

1)藤堂明保他(編)(2011)『漢字源改訂第五版(CD-ROM版)』学研 より引用した。

<図1>



<図2>



<図3>



Ⅲ. イメージとその限定

私たちが認識する事物は、数多くある。人間社会が複雑になれば、それだけ表現するのに必要な文字は増えてくる。①～③のように造られた漢字だけでは、足りなくなるのである。そこで登場するのが、④の形声文字である。形声文字は、漢字の中の90%以上を占めており、漢字の中で一番多い。

形声文字は、一般的に「意味範疇」を表す部分と「発音」を表す部分から成り立っていると言われる。例えば「抱」という漢字は「扌=手」と「包」からできていて、「手」は「意味範疇」を、「包」は「発音」を表しているという。しかし「包」は発音を表すというが、意味を持たず音だけある言語は存在しない。加納(2011:9)で「漢字の造形のパターンは基本的には「音・イメージ記号+限定符号」の組み合わせである」と言っている。つまり「包」は「音・イメージ記号」を表し、「手」はその「音・イメージ記号」で表されるイメージを限定する「限定符号」の役割を持つのである。本稿の漢字教育法もここに注目する。

「イメージを限定する」とは、どういうことなのだろうか。例を韓国語に移して説明

する。例えば「뽑다」は、どのような「イメージ」を表すのだろうか。「뽑다」を述語にもつフレーズには、「풀을 뽑다」「몫을 뽑다」「사람을 뽑다」などいろいろある。中には「커피를 뽑다」「새로운 자동차를 뽑다」のようなものまである。ここには「뽑다」が共通して持っているイメージがある。そして「풀을」「몫을」「사람을」「커피를」「자동차를」の部分は、その「뽑다」が持つイメージを限定して、「뽑다」のイメージを具体的にしているのである。

試しに上記の様々な「뽑다」を漢字のように表してみると図4～図8のようになるだろう。

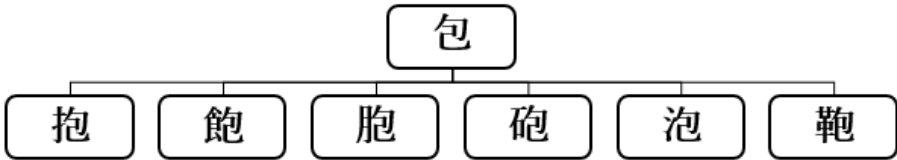


まずイメージを表す「뽑」に、そのイメージを限定する記号をつける。「풀을 뽑다」は、草が関係しているから「艹」をつけて<図4>のようになる。「몫을 뽑다」は金属に関係しているから「金」をつけて<図5>のようになる。同じように「イ」、「食」、「車」のイメージを限定する記号をつけると<図6><図7><図8>のようになる。学習者に上記のような説明で「イメージ」と「イメージの限定」の関係を理解させることができた。

「抱」に対して「包」はイメージを表し、「扌=手」は「包」のイメージを限定する役割を持つと述べた。「包」の字は、胎児(巳)を子宮膜がつつつんでいる様子を描いた象形文字で、そこから「中の物をつつむ」というイメージができた。上述した「뽑다」のように「包(中の物をつつむ)」だけでは、イメージが漠然としているので、そこにイメージを限定する文字をつけてイメージを具体的にするのである。例えば「抱」「飽」「胞」「砲」「泡」「鞆」の漢字は、「包(中の物をつつむ)」に「扌=手」「食」「月=肉」「石」「氵=水」「革」をつけて「包(中の物を

つつむ)」のイメージを具体的にしている。「抱」は「手+中の物をつつむ」で「だく」という意味になる。また「飽」は「食+中の物をつつむ」で「腹の中に食べ物をたくさん入れる」つまり「腹一杯食べる」または「あきる」という意味になる。同じく「胞」は「肉+中の物をつつむ」で「膜でつつむもの」を意味し、「砲」は「石+中の物をつつむ」で「石をつつんで飛ばす武器」を意味する。「泡」は「水+中の物をつつむ」で「水が空気をつつんだもの」つまり「あわ」を意味し、「鞆」は「革+中の物をつつむ」で「革で中の物をつつむもの」つまり「カバン」を意味する。

<図9>



このようにしてできた<図9>のような「包」を中心とした「抱」「飽」「胞」「砲」「泡」「鞆」を加納(1988:7)では「語族」と呼ぶ。また「これらは音の類似、イメージの類似、形の類似の三拍子がそろっている」と言う。<図9>の語族で言えば、全て「ㄆ・ホウ」という音で共通し、「中の物をつつむ」というイメージで共通し、全てに「包」の形を含んでいる。

今までバラバラで覚えていた漢字を「漢字語族」でまとめて教えれば、学習者は負担なく、楽しく覚えらるるはずである。

IV. 授業での提示方法

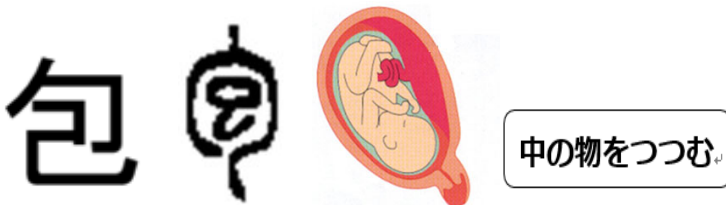
IVでは、IIIで述べた原理を実際の授業で、どのように提示していくのか述べる。提示の順序は、以下の①～④である。

- ① 「漢字語族」の中心となる「イメージ」
- ② 「漢字語族」の「形と音」の類似
- ③ 各「漢字語族メンバー」の意味と「訓読み」
- ④ ③の漢字を使用した例文(「音読み」「訓読み」)

①～④を<図9>の「漢字語族」を例として紹介する。

まず①では「漢字語族」の中心となる「イメージ」を提示する。その漢字の成り立ちと、そこから生じるイメージを提示し、学習者に把握させる。例えば「包」では、その成り立ち(図10)を提示し、「胎児が子宮の膜でつつまれる」から「中の物をつつむ」というイメージが生じることを示し、このイメージを把握させる。

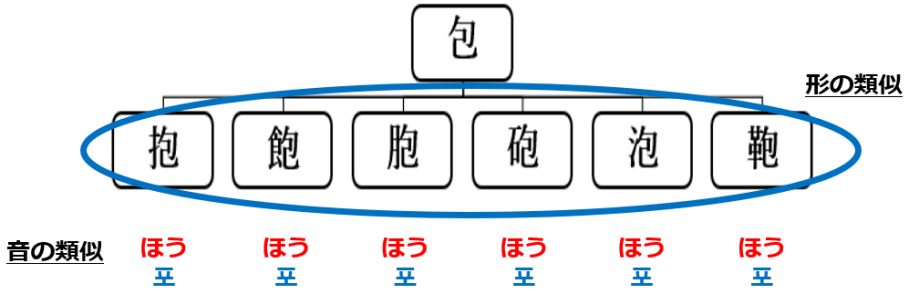
<図10>



次に②では、「漢字語族」に属する「漢字語族メンバー」(「抱」「飽」「胞」「砲」「泡」「鞆」)は、「形と音」も類似することを提示す(図11)。音に関しては、韓国漢字音と日本漢字音の対応関係にも言及する²⁾。

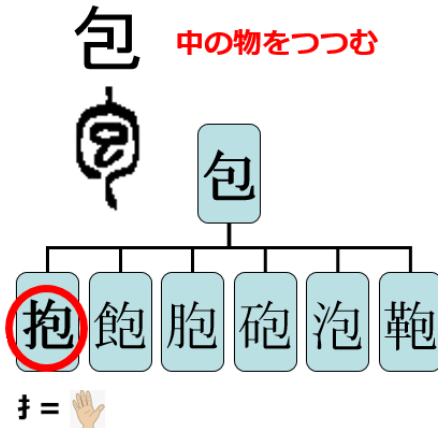
2) 韓日漢字音対応規則に関しては、乾(2014)を参照されたい。

<図11>



③では「漢字語族メンバー」の1つ1つを扱うのだが「漢字語族」の中心になる「イメージ」に、それを限定する記号を付けて、イメージが具体的にどのようなものか学習者に考えさせる。例えば「抱」の場合<図12><図13>のように提示する。

<図12>



<図13>

中の物をつつむ

抱 = 手  + 包

「抱」は「手+中の物をつつむ」、つまり「だく」という意味になることを理解させ、<図14>のようにイメージ画像とともに提示する。また「抱」は「訓読み」ではどのように読まれるのか(図15)、また「音読み」で使用される単語例を教える(図16)。

<図14>



<図15>

だ
抱く
いだ
抱く
かか
抱える

<図16>

ほう よう
抱 擁
—
ぽ ほう

最後に④では、③の漢字(抱)を使用した例文を以下のように示し、学習者に覚えさせる。

- (1) 何十年ぶりに再会した息子を^{ほうよう}抱擁する。
- (2) 熱のある子供を^だ抱いて、病院へ行った。
- (3) 先生の講義に疑問を^{いだ}抱き、質問をした。
- (4) 鞆を脇に^{かか}抱えて、走って行った。

このように①から④までの順で各「漢字語族」を提示していく。このような図や画像を使用した漢字学習は、学習者の興味をかき立て、漢字教育に効果的であると考えられる。

V. 評価方法

Vでは、以上、述べてきた漢字教育法に対する評価方法について述べる。評価目的は、以下の①②である。

- ① 漢字を音(意味)に変換できるか。
- ② 音(意味)を漢字に変換できるか。

①に関しては、漢字を認識して、それを文脈にあった「訓読み」または「音読み」に変えられるかどうかの能力を見る。また②に関しては、①とは逆に、与えられた文脈に相当する漢字に変えられるかどうかの能力を見る。②では、漢字を書かせることはしなかった。

漢字を書くことに関しては、乾(2014)でも言及したが、「パソコン・スマホ時代」の今日、漢字を実際に手で書く場面より、パソコンのキーボードやスマートフォンの

画面をタイピングして、出てきた漢字候補を選ぶ場面が多くなってきていると言える。学習者が日常生活の中で、実際に手で漢字を書く場面はそれほど多くないであろう。漢字を手で書く練習も、もちろん大切ではあるが、限られた時間内で効率的に漢字教育をすることを考えると、キーボードやスマートフォンの画面を打って、出てきた漢字候補群から文脈に適した漢字を選ばせる練習をさせたほうが先行事項であると思われる。文脈にあった適切な漢字を選ぶ能力がこれから重要になっていく。このような意味でも、「イメージによる日本語漢字教育法」は効果的な教育法だと考える。

具体的には、以下のような問題で評価を行った。

① 次の下線部の漢字をひらがなに直しなさい。

- (1) 何十年ぶりに再会した息子を抱擁した。
- (2) 熱のある子供を抱いて、病院へ行った。
- (3) 先生の講義に疑問を抱き、質問をした。
- (4) 鞆を脇に抱えて、走って行った。

② 次の○の部分に入る適当な漢字をA～Gの中から選びなさい。

- (1) 好きなハンバーガーでも毎日食べると○(あ)きてくる。
- (2) 敵からまず大○(たいほう)を撃ち始めた。
- (3) プレゼント用に○装(ほうそう)してください。
- (4) ○(あわ)がないビールはおいしくない。
- (5) 今年の○負(ほうふ)は何ですか。
- (6) 昨日、新しい○(かばん)を買った。
- (7) 細○(さいぼう)は分裂しながら増えていく。

A.包 B.抱 C.飽 D.胞 E.砲 F.泡 G.鞆

VI. おわりに

本稿では、「イメージによる日本語漢字教育法」に関して、その原理と実際の授業現場での提示方法について述べた。

まず、この教育法の原理となる「イメージ」とその「イメージの限定」について述べた。今まで「形声文字」は「発音」を表す部分と「意味範疇」を表す部分から成り立っていると言われてきた。しかし、それを「発音」を表す部分を「イメージ記号」とし、「意味範疇」を表す部分を「イメージを限定する記号」と解釈した。そして共通する部分を持つ漢字群を1つの「漢字語族」とし、「漢字語族」の中心となる「イメージ」を抽出した後、そこに「イメージを限定する記号」を付け、1つ1つの漢字の具体的な意味を導き出した。

次に、その原理を元に、実際の授業現場で、どのように提示していくか、その方法について述べた。①～④がそれである。

- ① 「漢字語族」の中心となる「イメージ」
- ② 「漢字語族」の「形と音」の類似
- ③ 各「漢字語族メンバー」の意味と「訓読み」
- ④ ③の漢字を使用した例文(「音読み」「訓読み」)

最後に、以下の①②の能力を評価するための具体的な問題を示した。

- ① 漢字を音(意味)に変換できるか。
- ② 音(意味)を漢字に変換できるか。

今後の課題は、この教育法を教える側にも教わる側にも、わかりやすく使用できる学習教材を作成することである。また授業での指導法をより明確にすることも重要になってくる。

<参考文献>

- 乾 浩, 『韓国における日本語漢字教育の提案』 『日本言語文化』 第28輯, 韓国
日本語文化学会, pp.255-274. 2014.
- 加納喜光, 『漢字の成立ち辞典』 東京堂出版, pp.1-8. 1988.
- 加納喜光, 『常用漢字コアイメージ辞典』 中央公論新社, pp.1-13. 2011.
- 菅野裕臣, 『朝鮮の漢字音の話』 神田外語大学韓国語学科, pp.28-178. 2004.
- 国際交流基金, 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』 凡人社, pp.7-115.
2002.
- 武部良明, 『漢字の教え方』 アルク, pp.1-6. 1989.
- 武部良明, 『文字表記と日本語教育』 凡人社, pp.93-104. 1991.
- 金栄振, 『김영진日本語漢字읽기요령』 進明出版社, pp.14-295. 1989.
- 朴冠植, 『秘法일본어漢字읽기』 正進出版社, pp.20-314. 1997.
- 이원찬, 『일본한자 쉽게 끝내주는 책』 시사일본어사, pp.10-146. 2006.

〈국문요약〉

이미지에 의한 일본어 한자 교육법

乾 浩(Inui Hiroshi)

본고에서는 "이미지에 의한 일본어 한자 교육법"에 관한 원리와 실제 수업 현장에서 제시하는 방법에 대해 언급했다.

우선 이 교육법의 원리가 되는 "이미지"와 "이미지의 제한"에 대해 기술했다. 지금까지 "형성문자"는 "발음"을 나타내는 부분과 "의미범주"를 나타내는 부분으로 구성되어 있는 것으로 인식되어 왔다.

그러나 본고에서는 위에서 언급한 내용의 "발음"을 나타내는 부분을 "이미지 기호"로 설명을 했고, "의미 범주"를 나타내는 부분을 "이미지를 한정하는 기호"로 해석했다.

그리고 공통되는 부분을 가진 한자군을 하나의 "한자어족"으로 하고, 그 "한자어족"의 중심이 되는 "이미지"를 추출했다. 또한 "이미지를 한정하는 기호"를 부과하고, 하나하나의 한자에서 구체적인 의미를 이끌어 냈다.

다음은 그 원리를 바탕으로 실제 수업 현장에서 어떻게 제시 할 것인가, 그 방법에 대해 기술했다. ①~④가 그것이다.

- ① "한자어족"의 핵심으로 되는 "이미지"
- ② "한자어족"의 "모양과 음"의 유사
- ③ "한자어족"에 속하는 한자들의 의미와 "훈독"
- ④ ③의 한자를 사용한 예문 ("음독"과 "훈독")

마지막으로 다음 ①②의 능력을 평가하기 위한 구체적인 시험문제를 제시했다.

① 한자를 음(의미)으로 변환할 수 있는가?

② 음(의미)을 한자로 변환할 수 있는가?

KeyWords : 일본어한자, 교육법, 이미지, 한자어족, 형성문자